

住民参加による床固工群後背地利用計画の立案について

建設省北陸地方建設局湯沢砂防工事事務所
新潟県津南町建設課
株式会社パスコ コンサルタント事業部都市整備部
株式会社パスコ コンサルタント事業部環境防災部
株式会社パスコ コンサルタント事業部環境防災部

井良沢道也
藤ノ木一郎
大塚政人
森田真一
○鈴木 崇

1. はじめに

津南町では、地域住民が日常レベルで自然と触れ合うことのできる空間、公園等が少ない状況にあり、生活環境の向上および町の活性化の観点から中津川の広大な河川敷を有効利用することが懸案となっている。そこで町は、まちづくりの観点からこの広大な敷地の有効利用を目的として河川空間の利用についての検討を行っている。

一方、中津川の川沿いの低地は、一部、運動公園や田畑として利用されているものの、流路の蛇行や偏流が著しく河道が不安定な状態であるため、河川敷の有効利用にあたっては、中津川の安定化が課題となっている。このため流路の安定化および河川空間の有効利用を目的に床固工群の整備が建設省によって計画されている。

このような中津川において、住民参加による床固工群後背地の利用計画検討事例を平成8年度に報告したが、今回、この後背地利用計画が設計段階までの検討を終了したので、改めてこれまでの住民参加による計画立案手法について整理を行い報告するものである。

2. 検討手法

2.1 個別計画の立案

2.1.1 床固工群整備計画

中津川の床固工群の計画流量は2,500 [m³/sec] と、この規模は他の地域の床固工群と比べて大きなものであるため、模型実験を行うことによって施設効果の評価や施工順位の設定を行っている。この模型実験の結果を受けて砂防施設の配置方針、形状等の設計方針、施工優先順位の検討を行っており、以上の結果を踏まえ、平成8年度には概略設計、平成9年度には、部分的に詳細設計を実施している。

2.1.2 床固工群後背地利用計画

中津川の河川空間の利用に関しては、中津川を軸とする河川空間整備計画の検討が町により立案され、これに基づき、床固工の後背地の利用について床固工群後背地利用計画が検討されている。この中では、床固工群の整備を前提条件として後背地の整備の方針、後背地に導入する機能の設定を行っており、これらを基にして施設配置計画の検討を行っている。

2.2 中津川を考える会の設置

上記の2つの計画は、床固工群を中心とした1つの空間整備の計画であり、まちづくりの観点からは地域住民の意見が反映されることが望まれる。このため、両計画を結びつけ、かつ地域住民の意見を反映するために「中津川を考える会」（平成9年度には「中津川整備を実現する会」として名称を変更した）を設置した。

中津川を考える会は、これからのまちづくりという観点から、将来のオピニオンリーダーとなる地元住民（自治会、婦人会、教職員、郷土史家、子供会等）、地元産業人（商工会、観光協会、農協、漁協、森林組合等）を中心に、建設省、町役場のメンバーから構成される。

2.3 中津川を考える会の運営

本会の運営には「参加者の合意を得ながら計画立案を行うこと」「参加者が意見を出しやすい方法を採用すること」「参加者の意見を均等に拾い上げること」が必要であり、この点を考慮してワークショップ形式を採用した。ワークショップ形式とは、事務局が資料を作成し、その説明を行う公聴会あるいは説明会的な性格の強い会議手法ではなく、会議の出席者に自主的に参加・活動を促すことを目的とした会議手法である。

具体的には、事務局（案）をたたき台とする様々な設問を事前に参加者に投げかけ、ワークショップの場で個人あるいはグループ毎に「意見を作成する」「質問を発表する」「意見をまとめる」という作業を行い、さらには参加者の手で各人の意見を分類・整理し合意を形成するという手法である。

本会では参加者の意見が出やすいように以下の手法を採用した。

(1) フリートーキング

参加者の意見を均等に拾い上げ、参加者の合意を得ることを目的としてフリートーキングという手法を用いた。参加者には事前にいくつかの設問を与えて置いて、班ごとにKJ法を用いて記入したカードをフリートーキングを行いながら分類・整理を行い、参加者の意見の集約を行った。この方法により、

参加者全てが自分自身の意見を他の参加者に表示することができ、均等に参加者の意見を聴取することが可能となり、また、意見の整理・集約に当たっても、その場で参加者の合意を図りながらとりまとめることができた。

今回の事例では「町の活性化のキーポイント」「河川空間利用の方向性」「河川空間利用計画に導入する機能」「中津川に対する思い入れ」等の意見集約手法として用いた。

(2) リバーウォッチング

対象地域の持つ課題を現地を見ることによって再認識すること、そして地域が元々持っている地域資源を確認することによって、より現地に即した施設配置計画を立案・確認するために、リバーウォッチングという手法を用いた。

今回の事例では、参加者に事前に導入する機能の配置(案)図を配り、参加者と共に川沿いおよび河道内を歩き、参加者各人から川の現況、導入機能、配置(案)についての意見を収集した。

収集した意見は5名程度の班で施設配置(案)としてとりまとめ、さらに各班の案を総括し、導入する機能、施設配置(案)について本会としての意見の合意を図った。

(3) ロールプレイ・ディベートゲーム

参加者の意見を均等に拾い上げると共に、計画の実施に当たっての課題を抽出するためにロールプレイ・ディベートゲームという手法を用いた。

ロールプレイ・ディベートゲームとは、設定された役割に従った模擬討議のゲームであり、まず、参加者をいくつかの班に分け、その班をあるテーマに対する肯定側と否定側とに役割を分担する。

各班には、各立場の主張を通すように主張の根拠、相手側への質問、反論を組み立てて実際に模擬討論を行う。論理を組み立てる際、それぞれの班の中で班員に様々な立場の人となってもらい、それぞれの立場から見た計画の問題点や解決方法を考えてもらう。

今回の事例では、参加者を1班6人程度、4班に分けて後背地利用計画の必要性について討議を行った。

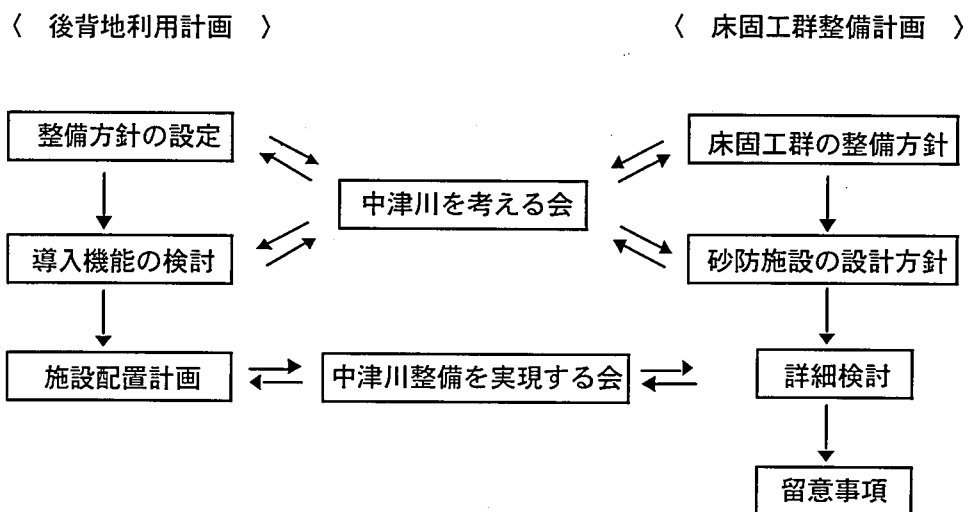


図 2.1 両計画と中津川を考える会の関係

3. まとめ

今回、床固工群後背地利用計画の立案にあたり、住民参加による計画立案手法として、また床固工群整備計画、河川空間利用計画の両計画を結びつける組織として中津川を考える会を設置し、会の運営については住民の意向を引き出す方法としてワークショップ形式を用いた。

両計画を結びつける組織として中津川を考える会を位置づけたことによって、会を通して両計画の内容を確認することができたと共に、床固工群整備計画の設計方針に住民意見を反映させることができた。また、後背地利用計画に関しては、常に住民の意見を採り入れたため、反対意見もなく計画を立案することができ、地域住民と行政の良好なパートナーシップを形成することができた。

ここで、今回の事例より、住民参加による計画立案を行う場合の留意事項として以下に示す点があげられる。

- ・ 計画の構想段階で住民を参加させる。
- ・ 幅広くかつ均等に住民の意見を収集することができる方法を選ぶ。(ワークショップ形式)
- ・ 得られた意見を踏まえた計画案を再度、住民にフィードバックをすることで住民の合意を得ながら計画を立案する。

今後も、この方式によって培われた行政と住民の良好なパートナーシップを継続し、今後の事業の展開にも両者の関係を活かしながら良好な河川空間の整備が実現することが望まれる。